

物を買う瞬間、物を食べる瞬間、服を着る瞬間、そのすべてに感動とコミュニケーションがあって、あらゆる消費活動が文化活動になり、演劇的になる。つまり、意味と物語というものを自覚しながら、何事にも、文化を共創していくようになるんです。

— 仕事はどのようにになるとお考えでしょうか？

今は多くの人が、24時間365日を、すべて仕事に差し出すことを余儀なくされていますよね。それならば、アート自体を仕事にしてしまうのが一番早いわけです(笑)。アートをライフワークにする人が増えるということです。

もちろん、経済活動が駄目ということではなく、最優先する行動原理が、利潤の最大化ではなくということ。あまりにも高度化された資本主義によって、文化的な要素をもつ企業行動が市場で成り立たなくなってきたのが問題なんです。

コミュニケーション中心の仕事も増えるし、生産活動であっても、経済的合理性ばかりを追求せず、文化的な要素をもっと取り入れていくようになるでしょう。

難問を解く鍵、演劇

難問を解く鍵が演劇にあるとお話しされていましたね。

僕は、現代社会の難問、教育と医療に取り組んでいますが、演劇は、大きな可能性を秘めています。

まず、教育。今の日本教育の最大の問題は、サブモティベーションの欠如です。いかに子供たちの好奇心に火をつけるかが大事になります。学校や授業がなぜ存在するか、それは教科書=原作と、学習者=観客をメディアーションする必要があるからで、これが教師の仕事です。つまり、教師は演出家であり役者なわけです。そして、その部分が劣化している、または、そういう認識すらほとんど共有されていないんです。

医療現場では、いわゆる老人医療や終末医療といった、回復の見込みが少くない医療が多くなってきています。治るか治らないかでなく、老いていくことをどう捉え、意義付けを行うか、医師・患者・家族のコミュニケーションを通じて、その再構成が必要になります。これもまさに、演劇そのものでしょう。

これは劇作家・演出家である平田オリザさんが阪大でやっていることですが、人と人との対面をメインにしている。教育・介護・保育・医療などの社会的サービスを担う人たちには、あまねく演劇への理解と素養、一定程度のスキルが必要になります。演劇的な視点を身に付けるだけでも、大きな前進です。平田さんも、言われる「コミュニケーション・デザイン能力」が重要です。どの役割を誰に担わせたら良いのかを判断する能力ともいえます。

例えば、いじめられている子供の心を開く時に、どの順番で誰とのコミュニケーションを作ってあげたら良いのか、ということを考えること。あるいは末期ガンの方に告知すべきか、どう告知するか、残りの人生を誰とどう過ごしてもらうか、ということをデザインすること。これは医学界が作成する標準マニュアルで決めることではありません。すべてが、ケースバイケースです。コミュニケーション・デザイン能力の高い人々が関係者と相談しながら決めていくほうが幸せなわけです。

演劇的世界にしていけるために

経済的合理性ばかり追求しないということは余計なお金がかかるということであり、実行するためにはお金を稼がなくてはならないから資本主義を純化・強化しなくては行けない、という矛盾が生まれますよね。

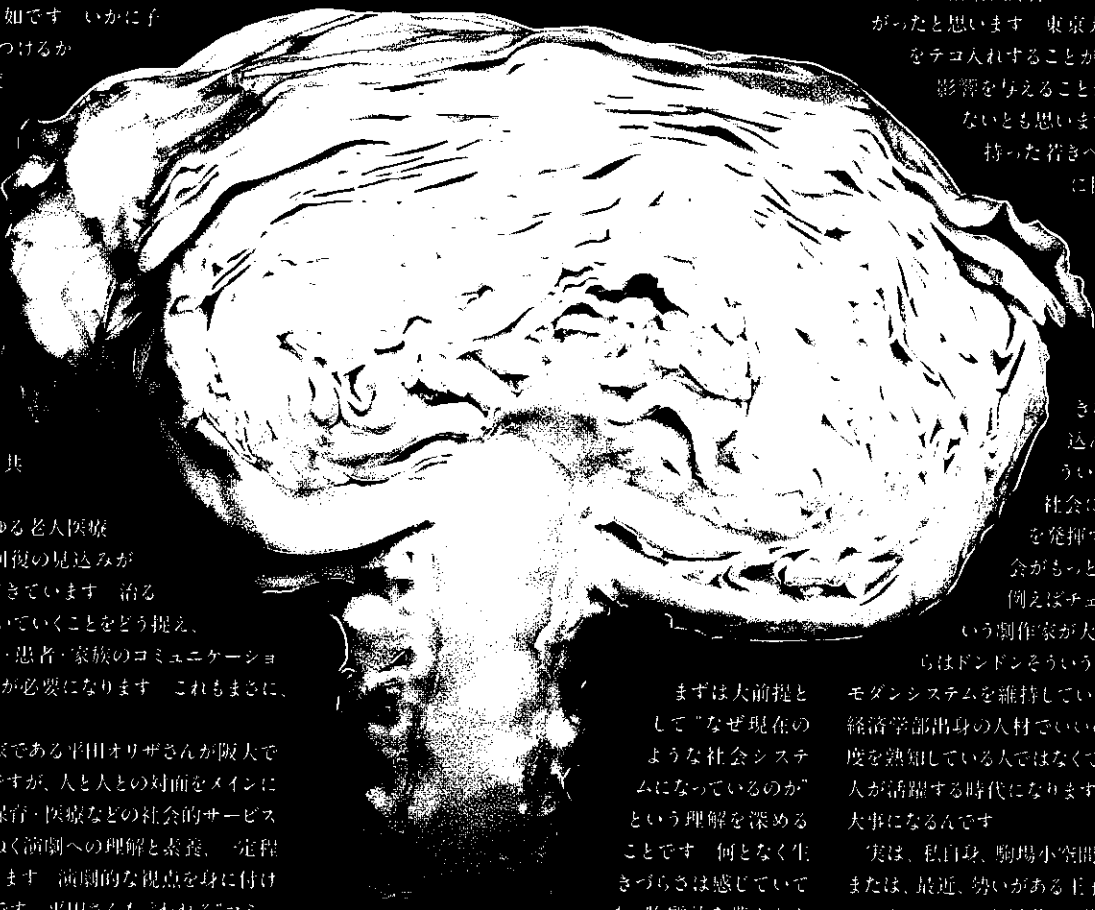
その悪循環から脱するのが幸近代ということですね。消費者・生産者の構造を、お互いが脱しなければいけません。各分野にその萌芽はあるんだけど、僕はそのひとつが演劇だとも思っています。演劇は市場原理

だけで考えると、絶対に成り立ちません。過去においては、王家や国家がサホードしていたし、一時は労働組合がサホードする場面もありました。そのどれでもないコミュニティに支えられた演劇というものが成り立っていく社会システムを作ることができたならば、経済的には非生産的であるが、しかし人間にとって必要なコミュニケーション活動を広める社会づくりに応用することができるでしょう。

例えば、宝塚歌劇団は、一人の役者ごとに後援会が作られています。この後援会は完全にボランティアで支えられる仕組みになっています。宝塚の男役を取り巻くファンクラブは、生産者でも消費者でもないんです。

別の例を出すと、ある芝居に1万円の評価があったとして、消費者は8千円に値引いてほしいと思いますよね。しかし支援者は、次も頑張ってもらいたいと思い、役者たちがバイトしないで演劇に打ち込めるようにと、1万2千円出そうとします。あるいは何回も観に行く。さらに、2回目に観に行く時に友達も誘えば、劇団収入は3倍になります。つまり、脱・消費者・生産者構造とは、患者会やファンクラブ、サホーターなどの営利目的でないコミュニティが、その間を埋めてくれるということなんです。

— 非営利のコミュニティを結成していくためにも、一人ひとりの価値観を演劇的なものに転換しなくては行けないですね。価値観を変えるということはとても難しいことだと思いますが、どうしたら良いと思いますか？



まずは大前提として「なぜ現在の社会システムになっているのか」という理解を深めることです。何となく生きづらさは感じていても、物質的な豊かさを求めるためのシステムが存在していることが根本的な原因だと理解できていないと、いつまでも今の状態から脱せられないでしょう。

さらに、社会システムは、みんなの価値観が変わっただけで自然に壊れるものではありません。価値観を変えた上で、新たな社会システムを努力して創らなければいけないんです。

例えば、今のシステムのもとでの「生産効率最大化のためのシステム内に留まって連日過労死基準を上回るサービス残業で精根尽きかかっているか、システムから飛び出してワーキング・ファアに甘んじるか」という、不毛な二者択一ではなく、新たな多様な選択肢をドンドン生み出していくための社会創造をしていかねばならないのです。制度とモデルと人材とチャンスとを具体的に作り出していかねばなりません。

幸近代を創っていくために、他に私たちができることは何でしょうか？

僕は、幸近代を創る少しの勇気、という感じで、「拍手・握手・挙手」ということを言っています。

劇団や交響楽団やNPOの教育支援など、非営利で人と人とのコミュニケーションを豊かにしようとする活動に接した時に、少しでもいいから応援してあげること。演劇

なら、誰よりも早くスタンディングオベーションしてあげることか、役者からではなく、観客から握手を求めてあげること。「私がサホーターをやります」という挙手をしてもらえればもっといいし、その団体の経営がダメだったら、経営手腕のある人はそこにコミットしてあげればいいんです。

また、劇団員が学校と関わりをもて、学校の教育に貢献してもらい、それに対して多少なりとも税金からお金がもらえるような仕組みができればいいですね。多くの地方議員・国会議員・メディア・有権者が賛同してくれば、これは成功するでしょう。1年間に10円だけでも国民が負担すれば10億円、100円なら100億円という額になります。それぞれが少しずつ応援することで、とても強い力を持つんです。

— そうやって、演劇活動を劇団がサホードしていくことも大事ですが、同時に、演劇活動を行う人自体が増えていき、かつ、社会から注目されていくことも大事ですね。

そうですね。演劇界の人が社会の歴史や成り立ちを、もっと勉強し、アートに携わる人たちがもっと連帯して、今までのサブカル的な自意識から、次なるメインカルチャーを創造する中心的存在になるという自意識を持つようにならないといけないでしょうね。駒場小劇場や早稲田小劇場は、その世代の最もプリアドな人たちが、いったんはそこに集い、再び散っていくという場でした。両劇場の消滅とともに、その流れは壊れてしまったように見えます。その結果、演劇のハワーは昔に比べて圧倒的に下がったと思います。東京大学や早稲田大学の小劇場をテコ入れすることが、演劇を通じて再び社会に影響を与えることができるようになるかもしれないと思います。演劇の潜在的な才能を持った若きベスト&ブライテストに、そこ

に目を向けてもらわないとホストモダンが始まりません。

劇団を生涯の仕事にしようとする人は、たいがい親や周りの大人は反対しますよね。演劇をやる人生をもう少しローリスクにすべきなんです。また、演劇に打ち込んでいる人や、若い時代にそういう経験をした人が、一般の社会においても、その経験や能力を発揮する場があるということ、社会がもっと理解すべきです。

例えばチェコで、パーツラフ・ハベルという劇作家が大統領になったように、これからはドンドンそういう時代になっていくと思います。

モダンシステムを維持していけばいい時代は、法学部や経済学部出身の人材でいいのですが、今後は既存の制度を熟知している人でなくて、ストーリーを創っていく人が活躍する時代になります。そうなるまで演劇経験者が大事になるんです。

実は、私自身、駒場小劇場でも早稲田でも下北沢でも、または、最近、勢いがある王子小劇場でもいいから、本当にクリエイティブな活動を、若い人たちと一緒に再びやっていきたいと思っています。人生を振り返って見て、やっぱり、学生時代、駒場や下北沢で芝居づくりに没頭しているときが一番楽しかったということに気がついたので……。

【下北沢と演劇】下北沢は、神・マツチキや赤多劇場など、多くの小劇場がある「演劇の町」。現在、下北沢で進行中の行政主体による再開発計画を進めれば、サ・ス・サ・サの再開発は取り壊されることになり、種々の団体が再開発計画に反対している。

【駒場小劇場】1976年ごろ、東京大学駒場キャンパス内にあった駒場寮の一部を劇場として使用できるように改装し、「駒場小劇場」という名称で開かれる。その経緯は「駒場高崎」・「駒場モーターランド」・「ミュージカル・コミュニケーション」などを基に、90年代から小劇場フェスティバル、1991年に駒場寮取り壊しを大学側が決定し、10年以上上野と大学側の対立が続いた後、留校された。1998年から駒場小劇場という新しい施設が建設され演劇活動が行われている。

【早稲田小劇場】早稲田大学の学生演劇から生まれた劇団・劇場の名称。1998年からは早稲田大学が所有しており、「どうも館」と名称を変更、学生に演劇発表の場として提供されている。

【キヤベツ】鈴木寛は、自ら知覚覚醒論、フラクタルなど複雑系の概念理論は、キヤベツをモットーとして使っていることが多い。2006年、東大退任には、今回のインタビューである上野弟子作「キヤベツ」の夜、演劇